The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾・慈済大学における日台学術交流研究会報告 ：「人文臨床と無縁社会 ： 人間的ケアはいかに可能か」
Author(s)	金子, 昭
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(1), p. 53-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24492
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

台湾・慈済大学における日台学術交流研究会報告

―「人文臨床と無縁社会：人間的ケアはいかに可能か」―

"The Possibilities for Humanistic Care: A Clinical Humanities Approach to Social Unconnectedness."

A Report on the Japan-Taiwan Academic Conference at Tzuchi University (Taiwan), 2012

金子　昭*
KANEKO Akira

1. 台湾での研究会開催まで

「無縁社会」という言葉は、2010 年の NHK 特別報道番組以来、我が国ではすっかり人口に膾炙している感がある。しかし、この言葉こそ知られていないけれども、東アジア地域の同じ民主主義国家である韓国や台湾においても、「無縁社会」的な状況は見出されるし、我が国におけると同様、宗教者がこの状況を打破すべくなんらかの役割を果たしているはずである。科研基盤研究（C）「無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究（研究代表・宮本要太郎）」の研究グループ（以下、宮本科研グループと呼ぶ）では、そのような問題意識を共有していた。

そこで、まず手始めに 2012 年 1 月 6、7 日の両日、韓国・ソウル市の円光大学ソウル事務所にて「無縁社会と宗教者の役割―日韓の現状」というテーマの下、日韓学術交流研究会東亜宗教学術フォーラムを企画・開催した(1)。このときは、研究会は「東亜宗教学術フォーラム」という名称で、発表者・参加者も日韓双方とも宗教学者・宗教関係者ばかりであった。宮本科研グループのメンバーからは、金子昭、渡辺順一、中西尋子、白波瀬達也が参加した。日韓の宗教研究者 5 人が研究成果を発表し、日韓の状況と相違点等について活発な意見交換がなされた(2)。無縁社会という言葉そのものは、

* 天理大学おやさと研究所・教授　akira-k@sta.tenri-u.ac.jp

日本においてのみ通用しているものだが、これが意味する状況は日韓に共通する社会現象であることを確認することができた。また、同じ民族でありながら、全く異なった政治的・文化的環境で育った北朝鮮からの脱北者への支援など、韓国固有の問題状況もあることも知った。こうした状況を知ったことは我々にとって貴重な知見となった。

当時（2011 年 9 月～2012 年 7 月）、私は台湾・台北市の中国文化大学日文系に客員教授（交換教授）として勤務していた。私は宮本科研グループの意を受けて、幾つかのつてを頼りながら、韓国と同様のテーマで台湾でも日台の学術交流研究会が開催できないだろうかと模索した。その結果、知人の中央研究院中国文哲研究所の廖欽彬氏を介して、同研究院民族学研究所の余安邦氏や淡江大学日文系の田世民氏とも台北市内で会って話し合い、検討を進めることになった。私は 7 月中旬に客員教授の任期が終わって帰国したが、その後もメール等で調整を重ねた結果、同 2012 年 8 月 31 日、9 月 1 日の 2 日間、日台学術交流研究会及び関連の見学旅行を開催する運びになった。場所については、当初、台北で比較的小規模の研究集会を考えていたのだが、結果的に台湾側の希望で場所は花蓮の慈済大学、規模もより大きく、内容もより学際的なものにしていくことに決まった。

今回は、日本側としては、宮本要太郎、稲場圭信、金子昭、渡辺順一、中西尋子、白波瀬達也のほか、慈済大学大学院で学んだこともある村島健司が加わり、計 7 名で参加することになった。

内容的には韓国でのシンポジウムを引き継ぐものであるが、台湾側の要望を入れて学際的な規模をより発展させたかたちになった。それがテーマの「人文臨床と無縁社会」という名称にも現われている。いずれにせよ、この日韓・日台の各研究会は、無縁社会と言われる昨今の社会状況に対して、それぞれの国で取り組まれている現場実践について、日韓・日台の研究者や実践者がそれぞれ報告を行い、討議を行う初めての国際的な研究交流の試みとなった。

人々が地域社会でともに生きる場を形成するにあたって、草の根的なつながりや「縁」づくり（支縁）は不可欠である。そこに、宗教者であるなしにかかわらず、生きる現場に密着した人間的な関わり方やケアが強く問われてくる。このテーマを扱う領域こそ、広い意味での「人文臨床学」と言える。この日台学術交流研究会のテーマが「人文臨床と無縁社会」とな

っているのも、そこに理由がある。そしてサブテーマも、「人間的ケアはいかに可能か―さまざまな現場実践より」と決まった。

学術交流研究会では、まずテーマ全体にかかわる宮本氏による基調発題に続き、「災害被害者及びその支援の課題」、「台湾先住民及びその支援の課題」、「精神病患者・信仰周縁にいる人々の課題」、「都市社会底辺層及びその支援の課題」の 4 部構成で、基調発題を含めると日台から計 14 本の発表を行うという、きわめて盛りだくさんの内容のシンポジウムとなった。日韓の時に比べると 3 倍近くの数である。それでもコメントの時間も含めて 1 人あたり 30 分を取ったので、朝 9 時前から夜 7 時近くに及ぶ長丁場のプログラムとなった。通訳の人員が足りないので、日中両国語による予稿集を配布することで発表自体にはとく通訳をつけず、主にコメント及び質疑応答の際に両国語に通じた参加者が同時通訳を行うことにした。

主催単位は、台湾側は慈済大学のほか、中央研究院、そして日本側は関西大学が引き受けることに決まった。実行委員は、日本側からは宮本要太郎と金子昭、台湾側からは余安邦、廖欽彬がつとめることになった。

日本側参加者は主に宗教学者・宗教関係者だったが、台湾側参加者は宗教分野にとどまらず、心理学や社会学の研究者、病院のソーシャルワーカー、映画監督など多彩な顔ぶれである。とくに台湾側の希望で、台湾固有の問題である「台湾原住民及びその支援の課題」が入ることになった。研究会翌日には見学旅行を予定し、そこで実際に先住民系 NGO の活動も見せてもらえる。多少経費等もかかるが、台湾で研究会を開催する意義もこういうところにあるので、見学旅行込みの開催方向で進めることにした(3)。

そしていよいよ 8 月 31 日、関係者が花蓮に集合し、日台学術交流研究会「人文臨床と無縁社会：人間的ケアはいかに可能か―さまざまな現場実践より」が慈済大学にて開催された。参加者は、日台双方よりあわせて約 30 名。慈済大学からも学生スタッフなどの協力もあり、盛況な会合になった。

2. 研究会の内容

この日台学術交流研究会のテーマと発表者、及びその概要は次の通りである（コメントの内容や質疑応答については煩雑になるので省略した）。

基調発題

＊司会・コメント担当：林安梧（慈済大学）

宮本要太郎（関西大学）「無縁社会への宗教者の関わり—総論と問題提起」[(4)]。

宮本氏は、「無縁」という文字から説き起こし、「無縁社会」がジャーナリズムではその否定的側面が強調される一方、アカデミズムでは肯定的評価も見られると指摘。宮本氏も後者の視座に立ち、「無縁」の状態が実は、既存の関係を超越したより根源的な関係性、人と人とが無条件で向き合う関係性に開かれていると述べた。そうした関係性の帯びる越境性・超越性・根源性・無条件性はきわめて宗教的なもので、とりわけ注目すべきは「越境性」の契機であるという。この契機を生み出す実践については、宗派間（宗教間）の差異の越境（超宗派性）、「宗教」の枠の越境（超宗教性）、宗教研究の主体と客体の区分の越境の 3 つがある。そして宗教者こそ、「この世を超越した縁」（無縁の縁）に生きる人々がつながり合うためのコーディネーターの役割を果たしうるのではないかと結論づけた。

第 1 部「災害被害者及びその支援の課題」

ここでは、村島氏が台湾大地震（1999 年）後の慈済会（仏教慈済基金会）の地域社会への浸透について、黄氏が八八水災（2009 年）後の官民の支援の諸問題についてそれぞれ報告した。一方、稲場氏は、東日本大震災（2011 年）の日本の宗教者の支援状況及び、そこで生じた新たな「共感縁」の広がりについて発表した。

＊司会・コメント担当：林安梧（慈済大学）

1-1 村島健司（関西学院大学）「仏教の地域社会化と祭祀圏—九二一大地震後の被災地における慈済会と民間宗教の邂逅」

村島氏の発表は、九二一大地震（1999 年 9 月 21 日の台湾大地震）の被災地の一つである南投県草屯町を事例に、復興後の被災地社会に慈済会が浸透していく状況を紹介し、分析するものだった。復興支援を通して、慈済会は信徒数を急激に増加させた。この地区における慈済会活動の大きな特徴は、現地の廟及びその信徒集団と積極的に交流を図りながら活動を展開していることである。同会が積極的に地域社会へと進出し、地域社会に根ざした活動を展開することによって、それと重なり合う祭祀圏を基礎とし

た地域社会の活性化も促されたと、村島氏は指摘した。

＊司会・コメント担当：周柔含（慈済大学）

1-2 黄智慧（中央研究院）「八八水害後の村落再建における文化伝承、部落の解体とエスニックグループのアイデンティティ危機」

現在では 14 部族に分類されている台湾先住民族は、多様な家族構成、社会構造を有し、台湾平野部の漢民族よりも長い歴史を有している。2009 年 8 月 8 日～10 日モラコット（莫拉克）台風の豪雨がもたらした水害（八八水災）で多くの村落が大きな被害を受けた。本来は、そうした民族の特性を尊重した多種多様な被災後の復興方法があるはずである。しかし台湾政府は、故郷の再建復興を考えておらず、被災した人々に「永久家屋」に移転するように強制的に要請した。（そうした永久家屋住宅地建設の民間パートナーとなったのが慈済会であった。）黄氏は、官民一体のこの性急な施策が先住民村落やその伝統文化を破壊するのではないかと、危惧を表明した。

1-3 稲場圭信（大阪大学）「東日本大震災における宗教者の支援活動」

東日本大震災に際しては、宗教者も多数、救援・支援活動にかかわっている。被災地では、100 を超す寺社・教会・宗教施設が緊急避難所や救援活動の場になった。稲場氏自身の活動の宗教者災害救援ネットワーク、また宗教者災害支援連絡会についても言及。発表はそうした宗教による震災支援の報告である。さらに明確な形の宗教者という形を取らないにしても、日本人の心性の内にある「無自覚の宗教性」もまた、多くのボランティアたちの原動力としてあること、そして震災支援を一つの契機として、あらゆる縁が弱まった現代日本社会の内に、そうした無自覚の宗教性にもとづいた「共感縁」が生まれたことも指摘した。

第２部「台湾先住民及びその支援の課題」

この第２部は、比較的小規模な NGO の活動を紹介した前半の発表と、先住民族の映画監督によるドキュメンタリー映画の解説という後半の報告に分かれる（テーマの性格上、発表者は全員台湾側参加者となった）。前半では、顧氏が「五味屋」による村起こしについて、曾氏が「台北市先住民ケア協会」について、それぞれ発表を行った。

＊司会・コメント担当：丘延亮（中央研究院）

2-1 顧瑜君（東華大学）「「無縁」から「有縁」にいたる五味屋」

顧氏は、「五味屋」[5]と命名された店の由来とそこでの活動を紹介した（当日は都合で顧氏が間に合わず、余安邦氏が代理発表）。五味屋とは、花蓮県寿豊郷の豊田駅前に日本統治時代から残る一棟の民家を、2008 年に村起こしの拠点として住民と東華大学の教師・学生が協力して、一軒の店として再生したものである。ここは、子どもたちが主体になって古道具類の交流売買を行いながら、地域におけるネットワークの場として機能している。ボランティアも台湾だけでなく、海外からもやってきているという。今では工房も増築し、宿泊施設も設けた。五味屋の活動は宗教系ではないが、互いに「貧しさへの学び」を通じて、「あなたの隣の家を愛しなさい」という教えの実践に努めているという意味で、宗教者の信念や思いを有していると結んだ。

2-2 曾麗娟（国防大学）「都市での風俗営業に従事する先住民女性及びその家族の生活再建支援」

台北市先住民ケア協会は 1999 年、キリスト教神召会牧師の顔金龍氏と日本籍の夫人の丸山陽子氏により、風俗営業店に従事している先住民女性を支援するために設立された。曾氏は、実際に支援を受けてきた幾人かの女性たちの事例を紹介しながら、同協会の活動とその特徴を説明した。現在では活動は多角的になり、独自の喫茶店の営業を始めたり、自立支援のための生活施設として「中継の家」を設けたりした。これらの活動は、自己卑下や自堕落な生活に陥りがちな女性をエンパワーし、生活再建をはかることに向けられている。

＊司会・コメント担当：舒詩偉（青芽兒永續教学センター）

2-3 マユエ・ビホウ（台南市政府）「ドキュメンタリー映画『山の中の微光』－ダカヌワ（達卡努瓦）部落の女性と災害後の復旧再建」

2-4 サロン・イスハハンブドゥ（映画監督、プロデューサー）「ドキュメンタリー映画『アリスの願い』—ブヌン族女性のライフヒストリーと部落の移り変わり」

マユエ・ビホウ〔馬躍・比吼〕、サロン・イスハハンブドゥ〔莎瓏・伊斯哈罕布德〕両氏の名前は先住民族のものである。昼食休憩の時間を利用して、二人はそれぞれ自作の映画『山の中の微光』や『アリスの願い』のさわりの部分をスクリーンに映写して説明した。これらの映画では、山地の先住民村落で生まれ育った女性が災害後、政策により強制移住をさせられ

て、住まいの村から切り離され、自らの文化や伝統が希薄になっていくことをドキュメンタリーとして描いている。内容的には、上記の 1-2 黄智慧氏の発表とも重なるものであった。

第３部「精神病患者、信仰の周縁にいる人々の課題」

ここでは、陳氏が日本統治時代の台湾における精神病患者の処遇についての歴史的分析を行い、また中西氏は日本における韓国系プロテスタント教会における日本人信者の傾向について発表した。

＊司会・コメント担当：廖欽彬（中央研究院）

3-1 陳妊湲（中央研究院）「ケア治療と隔離収容の間―日本統治時代の精神病院を語る」[(6)]

日本統治の初期、精神病患者はまだ行旅病人や孤児、流民や生活窮乏者と一律に扱い、同じ社会救済施設に収容していたが、総督府は 1934 年、台湾に最初の官立精神病院「養神院」を設置。また 1936 年以降、日本内地の精神病患者取り締まりに関する 2 つの法律（精神病院法と精神病者監護法）を台湾にも移植した。陳氏は、これらの官立病院や精神病に関わる法律の適用についての状況を植民統治の時代背景の下に紹介した。

3-2 中西尋子（関西学院大学）「無宗教の日本人と韓国系プロテスタント教会」

中西氏は、韓国の海外渡航自由化以降、日本各地に設立された韓国系プロテスタント教会における日本人信者の傾向を、1980 年前半生まれの「帰国者クリスチャン」の 3 人の事例紹介を通じて分析を行った。それによれば、彼らの共通項として、(1)キリスト教の信仰を持つまでは「無宗教」、(2)檀家制度上の「家の宗教」はあっても無関心、(3)韓国人クリスチャンとの出会いから教会に通うようになったことなどが挙げられるという。韓国系プロテスタント教会は、このように人間関係や既存の宗教伝統から切れた人々を拾い上げているのではないかと、中西氏は分析した。

第４部「都市社会底辺層住民及びその支援の課題」

ここでは、4 人の発表内容の中にもホームレス支援が中心的ないし副次的に取り上げられた。田氏は台湾のホームレスへの医療ケアの現状分析と課題について報告。白波瀬氏はホームレス支援も含めた広い意味での宗教の

社会活動の類型論を提示し、その事例を報告した。また渡辺氏は、自らの社会支援活動である「支縁のまちネットワーク」及び「支縁のまち羽曳野希望館」の報告を行った。方氏は、台湾のホームレス及び官民の支援について詳細な現状分析を行い、その課題について論じた。

＊司会及びコメント：金子昭（天理大学）

4-1 田麗珠（台北市立聯合病院）「ホームレスへの医療ケア―台北市聯合病院を事例に」

田氏は、自らが医療ソーシャルワーカーとして勤める台北市立聯合病院のホームレスへの医療ケアの状況を紹介しながら、その現状と問題点を指摘した。ホームレスは医療に関しては受け身的であり、病院側は万全な医療ケアを提供できていないのが現状である。彼らには、全民健保の身分回復や医療費付与の補助、医療及び生活両面にわたるケアなどが必要である。これらの業務を担当するのが医療ソーシャルワーカーであるが、田氏は自らの経験も踏まえて、ホームレスの健康状況を詳しく報告し、また彼らへの援助過程の困難さや努力目標についても述べた。

4-2 白波瀬達也（大阪市立大学）「現代日本における生きづらさと宗教―宗教の新しい社会参加のかたち」[(7)]

白波瀬氏は、現代の日本社会において人々の生きづらさに宗教がどのようなかたちで関与しているのかを分析した。宗教に対する拒否感が強い日本社会では、近年は宗教を前面に押し出さないアプローチが注目される。白波瀬氏は、「宗教団体・宗教者と結びつきのある組織」を Faith-Related Organization（FRO）と定義した上で、宗教活動への関与と公的機関との協働の組み合わせにより 4 類型に分類し、FRO の多様な社会的布置や展開の諸相について論じた。

＊司会・コメント担当：田世民（淡江大学）

4-3 渡辺順一（金光教羽曳野教会）「「ホームレス支援」から「支え合いのまち」づくりへ―「宗教」を拠点にした地域「支縁」活動」

渡辺氏は金光教の教会長であるが、宗教・宗派を越えた宗教者達や様々な非宗教セクターの人々と共に、「無縁社会」を克服する為の社会活動を模索している。宗教施設、宗教文化、宗教者の数だけ、社会支援のスタイルやカルチャーがあり、それぞれの仕方に合致する支援スタイルを開拓しつつ、多様な地域社会のなかで多様な活動を実験的に展開していくべきであ

る。この活動の展開には、とくに新宗教の場合、閉じた「宗教」の枠組みを超えて、地域社会の人々の「痛み」へ向けても開かれていく可能性があるとし、渡辺氏自身、そのような自覚を持って始めた「支縁のまち羽曳野希望館」の活動について詳しく紹介した。

4-4 方孝鼎（朝陽科技大学）「公私セクターによるホームレス支援の回顧及び批判」

台湾のホームレスは、不本意にホームレスになった者、短期－過渡的なホームレス、長期ホームレスの 3 種類に分類でき、それぞれ異なる生理的、心理的、社会関係的な特徴があり、福祉サービスの需要も異なる。彼らへの支援は、生存保障、施設保護、職場復帰、家庭復帰を主軸として行われている。問題になるのは長期ホームレスであるが、方氏は社会的排除理論に依拠しつつ、排除の観点とホームレス支援とが一つの正常な社会生活の姿を共に前提としていると分析し、彼らの自己決定を尊重すべきではないかと述べた。野宿生活もまた一つの生活のあり方の選択なのではないかと示唆した。

こうして全 14 本の発題報告が行われた後、余安邦（中央研究院）の司会により、参加者全員による総合討論が行われた。多岐にわたる話題が出て、活発な質疑応答が交わされた。日台双方の参加者にとって、非常に実りの多い有意義な研究会となった。

日本側が宗教学的アプローチが中心だったのに対して、台湾側は「人文臨床」という、より広い文脈からアプローチした発表内容であった。宮本科研グループもまた、実際に宗教者が関わる町づくり実践の NGO 組織「支縁のまちネットワーク」にも関わっているので、その問題関心は台湾側の発表とも相互にかみ合うものであり、そうしたより広い文脈のアプローチから得るところが多かったように思う(8)。台湾独自の問題として、人口の約 2%を占める先住民族への支援が取り上げられたが、これは日本側参加者にとって初めて学ぶものであった。

台湾側では、国家機関としての中央研究院の研究者（余安邦、廖欽彬、黄智慧など各氏）が関わってくれたのだが、その発表やコメントは、先住民族の思いに寄り添い、とても共感的な内容であった。また、慈済大学が開催校だったにもかかわらず、同大学の母体である慈済会の災害救援に対

する批判的な発表などもなされた。そうした批判的意見をも受け入れる寛容さが慈済大学にあることには、正直言って感嘆する思いであった。通常、宗教系大学ではなかなかそうはいかないだろう。私は、学術研究の社会的責任、また在野的な批判精神の大切さというものを深く感じた。

3. 花蓮周辺の先住民村訪問と NGO 見学

研究会の翌 9 月 1 日、2 日は、花蓮近郊及び台北市内で活動している NGO 団体を訪問し、その活動の様子を見学した。訪問したのは、顧瑜君氏の発表で取り上げられた「五味屋」のほか、先住民の子弟教育に力を入れている「啄木鳥全人教育協会」、また先住民族の伝統文化の再興に務めているタバラン（太巴塱）部落やサンシン（山興）部落などである。これらの訪問地を台湾側参加者と共に貸切バスに乗って廻った。これらの見学旅行は、台湾人でもなかなか訪問できないところを廻ったという。

啄木鳥全人教育協会は、先住民子弟の健全育成を目指した活動を行っている社団法人である。台湾先住民族の信仰は現在、キリスト教が 9 割を占め、たいていの集落にはキリスト教の教会が存在する。こうした社会活動の背景にも、キリスト教精神や教会ネットワークの活用が垣間見られる。同協会では、人形劇や部落の訪問ケア、老人ホーム慰問、中古物資の販売などを通じて、ともすれば台湾社会の中にあって劣等感を抱きがちな先住民の青少年に、技術や人間関係の仕方を教え、自信を持ってもらうよう励ましている。

啄木鳥全人教育協会は、大富という鉄道駅前に洒落た喫茶店「啄木鳥的花園」を持っているほか、日本時代の製糖工場跡地の広大な公園の中に創作料理レストラン「啄木鳥的家 CASA」を経営している。「啄木鳥的花園」では、先住民（ブヌン族）の若いウェイトレスも自分の部族語の歌を聴かせてくれた。（大富は戦前の日本統治時代は大和と言った。大和は文字通り「やまと」と呼び、この呼称は今でも高齢者の間では通用している[(9)]。）

次に訪問したタバラン部落はアミ族の村である。アミ族は 14 部族ある台湾先住民族の中で最大の部族である。タバラン部落では今、若い世代が中心になってアミ族の伝統文化や信仰の復興に努めている。ここでは近年に

なって復元された「祭祀の家」で、アミ族の伝統的な生活についての話を聞いたほか、祖先の霊が宿る同部落の聖地も訪問した。

一方、サンシン部落は先住民族のアミ族とサキラヤ族、また漢民族の混合集落である。部族の頭目である黄松徳氏はこのとき 86 歳、昭和と歳を同じくしている。黄氏は、自宅にアミ族の生活や歴史を伝える独自の小博物館を持っており、流暢な日本語でアミ族の昔の暮らしを語ってくれた。見学旅行もこの頃には日も暮れて、空には満月が上がりつつあった。この夜は日台の参加者皆で、月明かりの下での野外晩餐会となった。独特な各種山菜、地鶏の丸焼きや蝸牛の蒸し焼きなど、「原住民風味」の料理を満喫した。ここでも、女性たちが先住民族の歌を聴かせてくれた。

台湾（とくに花蓮）での宗教者の社会活動といえば、慈済会ばかりが目につくが、今回は、たとえ小さくても地域で拠点作りをしている団体の力強い動きを見せてもらったように思う。巨大教団のおひざ元にありながら、その大きな渦に取りこまれることなく、自分たちの見識と問題意識を大事にしつつ、独自な動きをしている姿は、今後の草の根の活動のありかたを考える上でいろいろと参考になった。

今回の企画の見学旅行はこの日で終了したが、翌 9 月 2 日は日本人参加者だけで、曾麗娟氏の発表で取り上げられた台北市先住民ケア協会を訪問した（曾氏自身も参加してくれた）[(10)]。ここでは、同協会の丸山陽子氏より、先住民女性とその子弟のケアについて詳しく説明を受け、また子どもたちの活動の様子も見学させてもらった。活動には明確にキリスト教的バックボーンがあり、教会活動と密接に連動していることが分かった。

今回の研究会及び訪問見学を通じて、とくに宗教系の NGO 活動実践のあり方を考える上で、日台の間では共有できるものが多いことをあらためて感じた。韓国の状況なども重ねあわせた上で、今後継続して日台韓による共同研究を続けていけば、この分野に関する大きな学術的貢献になると思う。

註

(1) この日韓学術交流研究会については、私は『中外日報』2012 年 1 月 26 日号「論談」に「無縁社会と宗教者の役割～日韓の状況―ソウルの『東亜宗教学術フォーラム』から―」と題して、その報告を掲載した。
http://www.chugainippoh.co.jp/ronbun/2012/0126rondan.html

(2) このときの発表者と発表タイトルは次の通りである。
中西尋子（関西学院大学）「在日韓国人社会における在日大韓基督教会の役割」
申光澈（韓国・韓神大学）「多文化社会における宗教」
白波瀬達也（大阪市立大学）「最貧困地域における宗教者の支援活動—大阪・釜ケ崎を事例に」
李元範（韓国・東西大学）「無縁社会と宗教文化交流—韓日両国の宗教社会における同質性と異質性—」
金子昭（天理大学）「“無縁”を“有縁”化する仏教ヒューマニズムの展開—東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動を通じて—」
　総合討議では、韓国側から柳誠旻（韓神大学）、日本側から渡辺順一（金光教羽曳野教会）がそれぞれコメントを行った。

(3) 日台学術研究会及び見学旅行の模様はすでに別のところにもエッセイ風に書いた。本報告の第 3 章「花蓮周辺の先住民村訪問と NGO 見学」は、そこでの記述を用いている。金子昭「無縁社会を生きる人々へのケア—日台の草の根の交流を目指して」、『宗教問題』1 号、白馬社、2012 年 12 月 1 日、82-90 頁。

(4) この発表は、大谷栄一・藤本頼生編著『地域社会をつくる宗教』（明石書店、2012 年）所収の同氏による「第 5 章 支縁のまちネットワーク」155-178 頁に連動した内容である。

(5) 「五味屋」の命名の由来は、「甘、甜、酸、苦、辣」という日本料理の 5 種類の味付けにちなみ、「5-way」にまたがる人生の各種滋味を取り入れ、人間性あふれる地域づくりの拠点にするというものである。（Way と「味」の中国語の発音は同じで、「五味屋」は「ウーウェイ・ウー」と発音する）。

(6) この発表内容は、陳姃湲編著『看不見的殖民邊緣』（玉山社、2012 年）所収の同氏による「第 7 章 在照顧治療與隔離收容之間:殖民地台灣的精神病院」144-159 頁に基づいている。

(7) この発表内容は、高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア』（勁草書房、2012 年）所収の同氏による「第 4 章 生きづらさと宗教—宗教の新しい社会参加のかたち」73-89 に基づいている。

(8) 宮本科研グループからは「支縁のまちネットワーク」の母体になったソウル・イン釜ケ崎の活動についてまとめた『貧困社会ニッポンへ』（アットワークス、2008 年）を台湾側に寄贈し、台湾側からは余安邦氏より日本側参加者全員に、余安邦主編『本土心理與文化療癒－倫理化的可能探問』（中央研究院民族學研究所、2008 年）、『人類學家的足跡－臺灣人類學百年特展』（中央研究院民族學研究所博物館、2011 年）、陳姃湲編著『看不見的殖民邊緣』（玉山社、2012 年）、林安梧譯著『新譯老子道德經』（讀冊文化事業）が贈呈された。

(9) 大富では、ドキュメンタリー映画監督で郷土史家の赫恪氏が同行した。赫恪氏は「啄木鳥的花園」にて自らの活動を紹介し、同氏の家にも案内してくれた。また同氏より郷土史の自著『大和志 一個村落的誕生』（行政院客家委員會、2003 年）をいただいた。

(10) 私自身は今回の訪問で、この台北市先住民ケア協会に関心を持ち、同年 12 月末に再度渡台して、同協会を訪問し追加取材を行った。今後も研究調査を継続する予定である。